

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00364

研究課題名（和文）『弘前藩庁日記』演劇上演記録の研究 享保期座敷芝居の解明

研究課題名（英文）Research into Hirosaki Hanchō Nikki, a record of plays that were performed:
Elucidation of "zashiki (sitting room)" plays during the Kyōho period

研究代表者

武井 協三 (TAKEI, Kyozo)

国文学研究資料館・その他部局等・名誉教授

研究者番号：60105567

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：歌舞伎と人形浄瑠璃は日本文化における重要な伝統芸能である。『弘前藩庁日記』の享保期 1716～1735 の歌舞伎・人形浄瑠璃関係記事を通読し、享保1年～8年 1716～1723 における歌舞伎・人形浄瑠璃記事を摘出してその翻刻を終え、学界への紹介の準備を調えた。さらに周辺の絵画資料・文献資料を発掘・購入して、劇場ではなく私邸での座敷芝居という上演形態の盛行を発見した。また台湾やイギリスなど、諸外国における座敷芝居の存在を発見し、比較研究するための準備を調えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、享保期 1717～1736 という日本演劇史上の未解明の時代について、歌舞伎・人形浄瑠璃の演目・役者・演技・演出などの上演実態を明らかにするものである。享保期は近世演劇史研究の暗部となっている。そこに照明を当てることによって、日本演劇史の未解明部分を明らかにするのが、本研究の学術的意義である。さらにその実態を、現代日本の演劇文化と比較することによって、将来の日本文化のあるべき姿を提示するのが、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：Kabuki and Ningyojoruri are important performing arts in Japan. I studied Kabuki and Ningyojoruri in mansions of daimyo, at kyōho era 1717～1736. I attended to documents named Hirosakihancho-nikki.

Kabuki is a traditional representative art in Japan. It is a kind of a musical theatre which has a unique style. Kabuki originated in the early 17th century and is still performed some 400 years later. Ningyojoruri is classical puppet play for adults, not for children in 17th～19th century.

研究分野：日本近世演劇

キーワード：歌舞伎 人形浄瑠璃 享保期 座敷芝居 弘前藩庁日記 演技

1. 研究開始当初の背景

近世演劇の研究において、享保期 1717～1736 の実態解明は立ち後れていた。ただ近年では、「座敷芝居」という大名屋敷などにおける歌舞伎・人形浄瑠璃の上演資料の発掘が進み、この資料を利用した、享保期の歌舞伎・人形浄瑠璃の研究進展が期待されていた。

2. 研究の目的

(1) 享保期という日本演劇史上未解明の時代について、歌舞伎・人形浄瑠璃の演目・役者・演技・演出などの上演実態を明らかにするのが本研究の目的である。

(2) さらにその実態を、現代日本の演劇文化と比較することによって、現代文化の問題点や課題を照らし出し、将来の日本文化のあるべき姿を提示するのが、本研究の大きな目的である。

3. 研究の方法

従来研究がなされてきた享保期 1717～1736 における歌舞伎・人形浄瑠璃の実態解明は、主として劇場(公的空間)における上演が対象とされてきた。本研究では、大名屋敷という私的空間への出張上演(「座敷芝居」という上演形態に注目して研究を進めた。具体的な資料としては弘前市立図書館に所蔵される『弘前藩庁日記』という膨大な資料群(「江戸日記」の部、全1,225冊)に分け入り、当該期間の歌舞伎・人形浄瑠璃上演記事を摘出・翻刻し、その学界への紹介と考察を実施する。さらに絵画資料・文献資料も発掘し、享保期座敷芝居の実態を解明する。

4. 研究成果

座敷芝居を記録した資料は『大和守日記』など数種の大名家の日記が知られていたが、本研究では、今まで埋もれていた『弘前藩庁日記』という資料にも記事が多出することを発見し、これに着目した。この資料の享保期 1717～1736 より前の記事は、すでに申請者によって学界への紹介がなされているが(『若衆歌舞伎・野郎歌舞伎の研究』八木書店、2000年)、さらに本研究では享保期とその前後に注目して、歌舞伎・人形浄瑠璃関係の記事を発掘し、その翻刻を実施して、学界に新たな資料を提供する準備ができた。これが本研究の最も大きな成果である。

具体的には享保1～8年 1717～1723 までの『弘前藩庁日記』(約20冊)の通読を完了し、該当記事数件を発見、これの翻刻原稿を完成した。ただ学術誌に掲載して学界へ紹介することは、コロナ禍によって、資料所蔵機関への最終確認のための出張調査を中断せざるを得なかったことで延期せざるを得ず、今後の課題として残した。享保全期について、まとめて紹介するのが適切と判断したためである。

享保6～8年 1721～1723 の、弘前藩邸における座敷芝居について、原資料のコピー調査を実施した結果、3件の歌舞伎・人形浄瑠璃関係記事を発見した。これは、享保期以降の『弘前藩庁日記』には、歌舞伎・人形浄瑠璃関係の記録は存在しないだろうとされていた従来の予測を、完全にくつがえすもので、大きな発見であった。

本研究の研究期間中は新型コロナウイルスの蔓延下であり、外出制限が発出されたことにより、本研究の眼目である『弘前藩庁日記』を所蔵する弘前市立図書館への出張がほとんど実施できなかった。そのため同資料の研究は停滞せざるを得ず切歯扼腕の研究状況にあった。そこで研究資料として市場に出た和本などを購入することによって、自宅でも可能な研究に切り替えた。ただこれによっても、座敷芝居の実態解明に、一定の成果を得ることが出来た。以下その成果について報告する。

市場に出た新出資料としては『浮絵人形遣い』『歌さいもん名取丸』などを購入することが出来た。これは座敷芝居の人形遣いを描いた絵画と、座敷芝居の内容解明に資する「歌祭文」という歌謡を記した、新出の資料である。これらの分析研究によって、座敷芝居の実態解明を前進させることができたことは幸いであった。

さらに『奥富士物語』という、たいへん興味深い写本資料を購入することが出来た。これには従来の近世演劇研究の常識を、大きくくつがえす記事を発見することができたので、やや詳しく記しておく。

『奥富士物語』には、寛文期 1661～72 のことと思われる、次のような記事がある。

当時の弘前藩主津軽信政が、大老酒井雅楽頭を自邸に招待したときのことである。大老という江戸幕府の最も重席にある酒井雅楽頭を接待するため、津軽家の家臣団は頭を廻らし、雅楽頭様のお好みである歌舞伎役者を藩邸に呼び、座敷芝居を上演させて接待の実を上げようとする。と

ころが弘前藩の家老たちの談合の中で、それはとても無理だと言う者があった。「総じて一枚看板にのるような」スター級の役者は、「五日、七日以前に言い込みては、先約段々ありて」「参ることかなわず」、「十日二十日、三十日前方より申し付けず候ては、良き役者の分、みな先約つかまつりまかりあり候あいだ、参る儀ござなく候」。つまり人気役者は、一ヶ月前くらいから予約しておかないと呼ぶことは無理だというのである。実際このときも御三家水戸藩の座敷芝居上演とバッティングしており、有名役者は払底していた。弘前藩では小倉作左衛門という芝居の舞台裏に顔が利く家臣が居て、なんとか都合をやりくりして、人気役者数名がかけつけ、酒井雅楽頭の接待が果たされた。小倉作左衛門という家臣の存在とその行動については、近年紹介された資料（『添田儀左衛門日記』）との照合が可能で、このエピソードの信憑性が保証されている。

『奥富士物語』の記事は、当時いかに盛んに座敷芝居が上演されていたのかを知らしめてくれる。一ヶ月以上前から予約しておかなければ人気役者を呼ぶことは難しかったのである。これは当時の大名屋敷（上屋敷・中屋敷・下屋敷あわせて約700～800邸）で、いかに座敷芝居が頻繁に上演されていたかを証しており、ほとんどの大名屋敷において、二、三ヶ月に一度という、驚くべき頻度で歌舞伎や人形浄瑠璃は上演されていたのである。これはつまり、ほとんど毎日のようにどこかのお屋敷で、歌舞伎・人形浄瑠璃が上演されていたということである。

江戸時代の歌舞伎や人形浄瑠璃は、芝居小屋つまり劇場という公的空間で上演されていたというのが、研究者の常識であった。その常識は、『奥富士物語』の記事によってくつがえったのである。しかも弘前藩の座敷芝居上演には、山鹿素行（儒学者）、渋川春海（天文学者）、狩野養朴（絵師）といった、錚々たる文化人・インテリが観客として参加しており「歌舞伎・人形浄瑠璃は江戸の庶民芸能」という、すでに一般に流布している常識も再考をせまられることになった。

本研究の当初の研究計画では、令和2年8月にベルギー国アントワープ市とでの開催が決定していたE A J S（ヨーロッパ日本研究学会）に参加し、「Behind the Curtains of Theater History The Locality of Early Modern and Modern Kabuki Productions」と表題するパネルで、研究成果を発表し、研究の国際的評価を問う計画であった。このため令和1年度の予算の約半分を残して、令和2年度の海外出張旅費の足しにする目論見であった。しかるにコロナ禍の世界的流行のため、令和2年8月に予定されていたE A J Sは令和3年8月へ延期され、さらに令和3年段階でも中止されてしまった。今後の開催を待って、自費でE A J S（ヨーロッパ日本研究学会）に参加し海外での評価を求め、本研究を完成させたいと考えている。

なお、座敷芝居は台湾の人形芝居を実見しており、シェークスピアの「ハムレット」の中にも記されている。これはひとり日本のみの上演形態では無く、世界的な現象であることが予測されるのである。この点からもE A J S（ヨーロッパ日本研究学会）での反響が期待されることを付言しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 武井 協三	4. 巻 -
2. 論文標題 歌舞伎研究の入口と出口 索引から索引へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歌舞伎の出口・入口 郡司正勝先生二十三回忌追善	6. 最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 武井協三	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 488
3. 書名 近世日記の世界（分担執筆：第十四章 『大和守日記』 芸能と大名）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------